

2001. 12. 1

No.9

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

■発行 特定非営利活動法人
地球の木 理事会
■発行責任 横川芳江
■編集 広報部
■事務局 T222-0033
横浜市港北区新横浜2-8-4
TEL 045-471-5536
FAX 045-471-5543
E-Mail:CZR10753@nifty.ne.jp

CONTENTS

- 武力ではなく言葉を 対立ではなく共に生きる道を
- 地域で出会った!身近なアジア
- 支援地から何を着ているの?>
- サラワク先住民族と語ろう
- バナナの裏で、今何が起こっているか知っていますか?
- INFORMATION



武力ではなく言葉を 対立ではなく共に生きる道を

理事長 横川 芳江

2001年9月11日 「国際平和デー」のその日、衝撃的なニュースが世界を駆け抜けました。一瞬、映画ではないか、いや、そうあってほしいと誰しもが思ったのではないかでしょうか。アメリカ合衆国を襲った無差別殺傷テロ事件とそれに続くアメリカの報復戦争。長い内戦と干ばつで困窮な状態にあるアフガニスタンの人々をさらに空爆が襲っています。日本ではアジアの国々から「軍事大国」の復活と懸念される自衛隊派の法案が国会で成立しました。

こうした一連の動きを私たちはどう捉えたらよいのでしょうか。20世紀が「戦争の時代」というならば、21世紀こそ生きとし生けるものが共に支え合い、平和で安定した「希望の時代」にしようと世界中の人々が誓ったはずです。

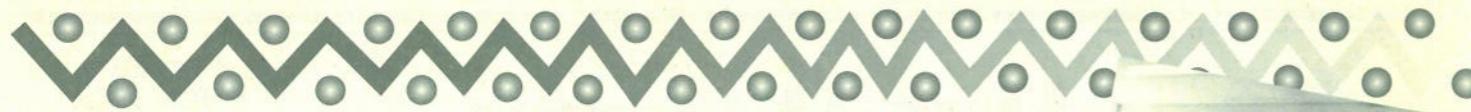
冷戦構造終焉後、世界は新しい「秩序」を模索してきました。しかし、それは市場経済のグローバル化によって、膨大な資金力を持つ大企業が国家をも動かし、新しい支配力となって社会を作ることに置き換えられています。大きな資金を動かして途上国の経済を翻弄し、人びとの資源を奪い取り、人権を脅かし、環境を破壊しつづけ、貧困を増大させています。私たちはこのような経済的な構造の中で、その恩恵にあずかり、過剰なまでに豊かな生活を享受しています。世界人口の僅か20%に過ぎない先進国に暮らす私たちが、経済的弱者から多くのものを奪い取っているのです。これ

こそ経済的な暴力といえるのではないでしょうか。テロを登場させる背景にはこの経済的暴力による絶望的な貧困があり、未来に希望をつなぐことの出来ない多くの子どもたちを生み出しています。

地球の木はこの経済構造を知るための開発教育・地球市民教育を進め、私たちの暮らしを見直すことを提唱してきました。また、支援先との交流から、地域と地域が結び合い、理解を深め、相互に自立することが大切であることを学び、活動を続けています。

このような立場から、11月1日付で地球の木声明文を発表し、マスコミ関係、NGO、市民団体に配信しました。また、タイ、インドネシア、フィリピン、マレーシアなどアジアの数カ国とのNGOと共に発した共同声明『戦争に反対しアジア平和をのぞむアジアNGO共同声明』に名を連ねました。「対立」を越えて「相互理解・連帯・共存」の実現を目指すために、「武器」ではなく「言葉」をもって、世界の人々と連携していきます。

21世紀を「希望の時代」とするために、私たち一人ひとりがしっかりとと考え、発言し、行動することが求められています。地球の木は、設立以来掲げ続けてきた「地球上のすべての人びとと共に生きる」ために、これからも地域と地域、人と人との結びつきを大切にしながら、相互に自立した社会の実現に向けて努力していきます。

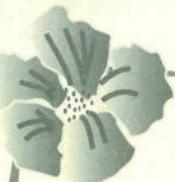


地域で出会った！ 身近なアジア

世界の人々と連携するには、先ず身近に住む人たちと「言葉」をもって理解し合うことが大切です。地球の木10周年記念のプレ・イベントとして、地域ごとに「身近な」アジアの人たちと触れ合い、学び合う企画を行ないました。様々な立場で日本に暮らす外国の隣人たちとの会話やフィールド・トリップから見えたものは…



インドネシアの踊り



交流会とフィールド・トリップ

- 9月16日 カンボジアのおまつり（ほくぶ・とうぶ）
- 9月28日 寿町と識字学校（ネパールチーム）
- 10月13日 久郷ポンナレットさんのお話と昼食会（西湘）
- 10月14日 インドネシア人妻の会・家族の会との料理持ち寄り交流会（なんぶ）
- 10月17日 フィリピンについて知ろう（県央・さがみ）
- 11月18日 川崎桜本コリアタウンのおまつり（川崎・川崎北）

ネットワーキングが元気を呼ぶ！

ほくぶでは、カンボジアのお盆のお祭りに参加した。小学校の体育館の片隅に、仏像がお棚にしつらえられ、お供物や果物が供えられる。長老がお経を唱え、人々が線香をあげる。日本のお盆とよく似た光景だ。しかし内戦時代の祖国で亡くなった祖先を、彼らはどのような気持ちで思い出しているのだろう。

法要の後の交流会で、たくさんのカンボジアの10代、20代の若者たちと話をすることができた。同胞の友人たちとの再会の喜びもあってか、とても楽しそう。奨学金で高校や大学に通う彼女たちに「学校はどう？」と聞くと、「日本人は親切だけれど、なかなか親しくなれない」と悩みを話してくれた。また「日本人は平和ぼけしている」ときつい一言も…。カンボジア文化を誇り、民族衣装を身にまとい、このような行事に進んで参加し、自己表現する彼らは頼もしい。

彼女たちは夢に向かって、着実に歩んでいる。日本の航空会社に就職した期待の星、日本文学を勉強しつつ、クメール語の翻訳家を目指すがんばりやさん、英語を学んで国際舞台へ羽ばたこうとする恥ずかしがり屋、みんなきらきら輝いてまぶしいほどだった。

しかし、祖国を離れ、日本にたどり着き、社会に馴染むまでの道のりには、私たちが想像もできない困難があったようだ。以前はひきこもっていたというある21歳の女性は、ある時若者キャンプに参加したことで友人ができてネットワークが広がり、ボランティア活動を始めたという。その彼女から次の様なメールが届いた。

平和な日本に暮らしている私は、内戦の爪痕の中で暮らしていた頃の事を忘れかけようとしていた。あなた方のお話を聞いた時に私も、平和を味わえた事のないカンボジアに居る人々に微力でも何か役に立ちたいと思いました。ですから、もし何か私が力になれそうな仕事がありましたらお声をかけていただきたい。

平和ぼけした心で、私たちはどれだけ彼らの心に寄り添えるのだろう。しかしこの日、私はカンボジアの太陽のような笑顔の彼らと出会ったのだ。今後、地球の木カンボジアチームは彼女たちと交流を深め、相互理解そして友好のための試みをしていく予定である。ネットワークすることが力になることを信じて…。

（ほくぶ 岸 夏代）



差別、偏見とたたかって

久郷ポンナレットさんは、カンボジアのポルポト時代の強制労働・大虐殺により両親と4人の兄弟を失いながらも生きのびてきた女性です。留学中のお姉さんを頼って来日してからも、言葉、文化の違いによる差別や偏見と闘ってきました。現在は、結婚されて平塚に住み、公民館、学校で日本とカンボジアを結ぶ交流活動をされています。

交流会の中でポンナレットさんは、ポルポト時代、労働の合間の休暇に母親に会うことが生きるための目標だったことなど、日本人が失いつつある家族の結びつきの強さを語って下さいました。いろいろな苦難にもかかわらず、目標を持って前向きに生きる強さ、自分が体験したような悲惨な思いを子どもたちに味あわせたくないという思い、外国人に対する差別と偏見をなくしたいという願いが強く伝わってきました。悲惨な話にもかかわらず、彼女の持つ天性とも言うべき明るさに救われた思いがします。（西湘 坂下まさみ）

ラマダンの断食にはどんな意味が？

「インドネシア人妻の会」との交流会は、鮮やかな衣装をまとった踊りの後、持ち寄った家庭料理を食べながらのなごやかなものとなりました。

語らいの中で、彼女たちは日本にいてもイスラムの教えを守って生活していること、ラマダンでの断食は本来、貧しい人たちを思いやるためにあり、その時は日本人の夫も協力してくれていること。インドネシアでは大家族が助け合って暮らしており、それに対して、日本では大家族制度が崩れたにもかかわらず長男偏重が根強いことに、彼女たちが違和感を感じていることなどもわかりました。日本は大好きで、何よりも「安全」だということを彼女たちは強調していました。

インドネシアの文化・宗教・生活のことが少しわかり、互いに認識を深めることができました。このような小さな交流を重ねていくことで、異なる文化や宗教、生活習慣への偏見を取り除くことができ、またあらためて日本を見つめ直すこともできます。日本に在住する外国人が増え、そのことを新たな「社会問題」としてとらえる人たちもいる現在、地域での地道な交流が必要だと強く感じました。これからもこのような機会となるべくたくさんつくっていきたいと思います。（なんぶ 真矢 公子）

姑との付き合い方に共感

県央・さがみは10月17日東林公民館にて「フィリピンについて知ろう」を開催。相模原国際交流ラウンジの内海苑梨さんに、お料理の紹介とフィリピンのお話をいただきました。メニューは、ギナタンハロハロとフィリピンのおかゆ。大好評で何度もおかわりしながらフィリピンの文化、洋服、遊び等の話に聞き入りました。

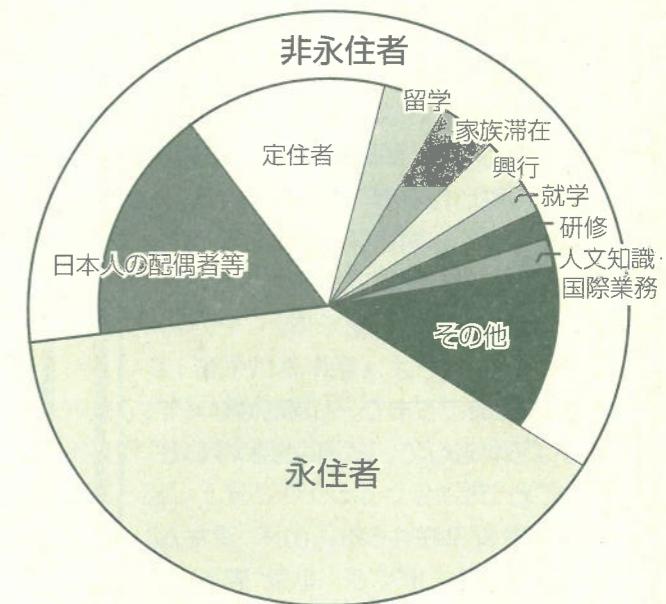
内海苑梨さんは日本に来て26年、日本語がとても上手な方です。印象に残ったのは、「主人の母とはケンカはしない。なぜか？私も我慢をしているが、相手も我慢しているのだから」という言葉。日本人として、フィリピン人として、ではなく、人として生きているのです。

私たちの近くにはたくさんのフィリピン人がいて、もっと気軽に声をかけて交流してみたいなど感じる2時間でした。内海さんはお料理がとても上手で、またこのような会を持ちたいと考えています。簡単に作れるレシピ、ご希望の方にはさしあげます。今度はご一緒にませんか。

（さがみ 広瀬 康代）

日本に暮らす外国人たち

在留資格別外国人登録者（2000年）
法務省入国管理局



現在、1,686,444人の外国人登録者が日本に住んでいます。1969年以降、毎年増え続けています。この他に不法残留者の数は251,697人で、過去最も多かった1993年に比べ、減少傾向にあります。

カンボジア

超便利! 「サロン」って使えるよ

都会でも農村でも、普段着は「サロン」です。一枚の布を筒状に縫い、筒の中に足を通したら、片側を引っ張つてくると巻き、ウエストに挟み込みます。ほとんどがタイやインドネシアからの安い輸入の生地で、ろうけつ染めのような模様ですが、みんなプリントで、大柄で派手な感じが人気です。市場に行くといっぱい売っています。さて、なんで超便利かというと、カンボジアは熱いので、日に3回は水浴びをします。



朝起きたとき、昼寝をした後、夕方仕事から帰っての3回です。この時サロンを胸まで引き上げて、洗濯もかねてゴシゴシ洗ってしまうのです。井戸のまわりや川で、ジャブジャブ、ゴシゴシ、水浴びだからサロンのままというわけです。

縫うのも簡単、洗濯も簡単、干すのも簡単、脱いだり着たりも簡単、太っても、瘦せても関係なしのところがすごくいいよね。歩いているうちに落ちないかがちょっと心配です。ちなみにプノンペンでは、昼休みは午前11時半から2時ごろまで。お風呂はなくて、もっぱら水浴びで、お湯は使わないとということでした。

(カンボジア在住6年 山下 望さん
のお話から ほくぶ 小泉 恵子)

ネパール

赤いサリーとジーパン

SOARSは識字教室を始めるまでのプロセスを大切にし、時間をかけています。毎年、たくさんの人たちの意見によって村を選定し、参加者を決める時も、続けられるか、活動をする意志があるなど、厳しい基準で選びます。先生を集め、トレーニングをし、やっとスタートします。日本のペースとあまりに違うため、行き違いも時にあり、その度に日本のものさしで測ってはいけないと気づくのです。

ネパールにはたくさんの民族が住んでいるので、当然服装も様々です。多くの地域で、結婚した女性はサリーを着ます。サリーとは6メートルほどの布地です。身体にフィットしたブラウスとペチコートの上からこの布を巻き付け、前できれいに折り畳んでひだをつけ、残りの布地を折り畳んで肩からたらします。農作業の時も、家事をするときもこのスタイルです。タルー族の女性たちはブラウスとスカートだけなので、都市部の人たちからは下着のままいるように見られるということです。

カトマンズ近郊の女性たちと交流をした時のことです。みんなとてもきれいな赤いサリーを着ていました。私たちスタディツアーの一一行は女性たちと向き合って座ったのですが、話を進めるのは男性ばかり。じれったくなつて、「女人たちの話を聞かせてください」と言いました。すると彼女たちは顔を見合わせ、恥ずかしそうにこう言ったのです。「私たちはあなた達のように男性と同じ服装はしていません。ですから心の中にはたくさん気持ちはあるのですが、男の人のようには話せません」

ふと私たちの服装を見てみると、みんなジーパン姿。服装によって女性の発言力が規制されるとは考へてもみなかったことでした。私たちは服装は自由です。でも、言うべき時に意見をはっきり言っているでしょうか?縛られるのは服装だけではないかもしれません。

(なんぶ 丸谷士都子)

ラオス

勝手なお願い はき続けてほしい「シン」

ラオスでは、女性は伝統的な服装である「シン」という筒状のスカートをはいています。巻きスカートによく似ており、余った部分を前で合わせてはきます。普段は綿素材のものをはき、上着はTシャツやブラウスですが、お洒落になると上下とも絹で作られたものを着ます。

アクセサリーとして、銀で作ったネックレスやベルト、ブレスレットを身につけます。

子どもたちも中学生になると男の子は学生ズボンとワイシャツですが、女の子はやはり綿素材の「シン」をはき、上は白いブラウスで通学する姿を、街の中で大勢見かけました。

小さな子どもたちは日本の子どもたちと同じような服装でしたが、私たちが訪れた時は乾期であったためか洋服がかなり土ボコリで汚れていました。電気も水道もまだ充分でない村では、洗濯もままならないのでしょうか。

しかし、ラオスでもピエンチャンのような大きな街に行きますとパンツスーツでバイクに乗る女性や、ジーパン姿の女性もかなり見られました。

私たち日本人も伝統的な和服を着なくなっていますので、勝手な願いかと思いますが、ラオスの女性には「シン」をこれからもはき続けて欲しいと思います。

(三浦 若林 英子)



赤いサリーの女性たち（ネパール）

フィリピン

フリフリ・ドレス でパーティへ

フィリピンの民族衣装にはバナナやパイナップルの繊維で織られ、美しい刺繡の施されたシースルーのバロンカタログ（男性用）、テルノ（女性用）がありますが、これは結婚式などに着る礼服用だそうで、普段はTシャツにズボンやスカートといった格好です。

特にサンフリアン村の子どもたちと/or/、こぎれいなとか、きちんとしたとかいった服を着ている子はいません。着古して色あせた、中には穴だらけのTシャツの子もいます。ここまで着てもらえば服の方も本望だといった感じです。それでも女の子たちは自分なりのお気に入りを着ている感じでした。髪もおかあさんにきれいに編んでもらっていたりします。おしゃれなのです。

夕方、畠の中の井戸のまわりで、子どもたち同士で、服を着たままシャボンを付け合い大きい子が、小さい子どもたちの面倒を見ながら水浴びしていました。子どもが水遊び好きなのはどこも同じで、キャーキャーと楽しそうな様子が地平線に沈む太陽をバックにシルエットとなって浮かんでいました。

音楽好きのフィリピンの人たちです。私たちの短い滞在中にも何度も深夜まで続く、歌ったり踊ったりの会がひらかれました。そんな時一人の女の子は、昼とはうつて変わって真っ白いサテンのようなフリフリのついたドレスに着替えておでましです。夜のパーティーだからおしゃれをして出て来たのでしょう。フィリピンでは特別なお祝い事の時、子どもたちを着飾させて家族でお祝いするそうです。そんな時の一張羅を持ち出して着たのでしょうか。得意そうに踊っていました。（川崎 中野 真理子）



Padawan-san

これ以上
木を伐らないでと
呼び続ける人たち

と

それでもすまして
森を食べ続ける私たち



Jackie-san

シンポジウム

「サラワク先住民族と語ろう 2001.10.19」

サラワクの深い森の中からはるばる日本にやって来たのは、椰子の葉で編んだ前後だけにつばのあるチャーミングな帽子を被った初老の男性、Padawanさんと、りんとした風情の若い女性、Jackieさん。そして真ん中で右を向き左を向きニコニコと通訳してくれたのは、日本からサラワクの州都クチンに留学しているという女子大生でした。

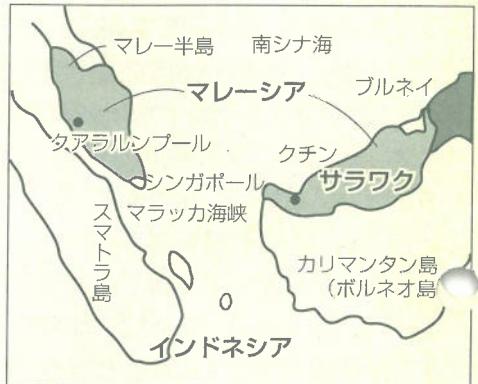
さて、どんな話が聞けるのかとワクワクしていると、まずPadawanさんが、いかに自分たちが森からすべてを貢い平和に暮らしていたかを、鳥の鳴き声なども混じながら、何とも幸せそうな顔で話してくれました。でもそれは20年も前のこと。伐採企業が入り始めてからはそんな暮らしもすっかり変わってしまいました。

●森がなくなる

サラワクの象徴で
あったサイチョウ

サラワクは、ボルネオ島にあるマレーシアの一州。人口の半分約90万人が森の先住民族で、ほとんどが狩猟や焼畑農業をしながら移動して生活している。80年代後から、世界最大の熱帯材輸入国日本はその鋒先をサラワクに向け、森林の伐採は急激な勢いで進む。あちこちの村で住民が森を守ろうと道路封鎖してきたが、中でも粘り強く今でも体を張って闘っているのがPadawanさんたちPunan民族だ。州政府は、土地の所有権を承認し保護して欲しいというPunan人たちの要望を無視している。

さらに彼らを苦しめているのが、伐採の跡地の「油やしプランテーション開発」。先住民族の人たちが「伐採のほうがまだマシだ」と言うのは、それが草一本残さない皆伐であり、生態系を消滅させる最終破壊だからだ。一度操業が始まれば、土地と土地への権利は半永久的に奪い去られる。農薬汚染、児童労働の問題もある。プランテーション開発に反対する住民と、その住民を威嚇するために開発業者が雇ったギャングが衝突し、死亡事件が起きた。そのウルニア村から今回来日したのが、イバン人のJackieさん。2年前に起きたこの事件で大勢の住民が逮捕され裁判が行なわれた。この間Jackieさんは弁護士を捜したり、その費用を確保したり、またなぜ事件が起き、どこに問題があったのかなどを外へ出て発表するなど活躍し、現在も一人だけ実刑判決の出たケースを最高裁に控訴するために奔走中である。



●身の回りにあふれるパーム油製品

* パーム油の生産量は全世界で2,000万トン。その半分をマレーシアが生産する。日本は輸入量40万トンのほぼ全部をマレーシアから輸入しており、その7割以上が食品関係に利用されている。パーム油がどんなに私たちの毎日の暮らしに入り込んでいるかは驚くばかりだ。マーガリン、インスタントラーメン、チョコレート、レトルト食品等それに「植物油」とあったら、それはほぼ間違いなくパーム油である。「地球にやさしい」というふれこみの石鹼や洗剤、化粧品の原料がパーム油であるという皮肉さ。

「このように近代化された日本に来てみてどう感じましたか」と問われたJackieさんが「私にとっての近代化社会というのは、高いビルや立派な道路などはさておき、「いかに人権がちゃんとまもられているか」ということにかかっている」と答え、拍手が起きた。

この貴重な集まりに参加したのは老若男女約40人。遠く他県からやって来た人もいる。森のにおいを漂わせたPadawanさんにやさしい目で、でもきっぱりと「木を伐りに来ないで！」と言われて大いに困ってしまう私たち。知らない間に開発側に立たされている。どうしようもない仕組みの中で、結果として森を食べている。本当にそうなのかなあ。堂々巡りの考えの後、ひとつ力強く感じるのは、心の底から湧いてくる自分の静かな怒りだ。「何にも出来ないはずはない」「何とかしたい」そう感じているひとりじゃない私たちは、今スタートラインに立っているのだと思う。

(広報 齋藤 和子)

*パーム油が油やしから採れる油に対し、ヤシ油はココナツから採れる油。

パームの日本語訳はヤシなので紛らわしいが、厳密に区別する必要がある。



安いバナナの裏で、 今何が起こっているか知っていますか？

日本が輸入しているバナナの量は年間約72万トンで、その内の9割以上はフィリピン産のキャベンディッシュという種類です。つまり、我々日本人が食べている安いバナナのほとんどはフィリピンのミンダナオ島のバナナ農園でつくられたものです。そのミンダナオ島の多国籍企業のバナナ農園で今何が起こっているか、皆さんは知っていますか？

それは4,000人以上にのぼるバナナ農園労働者の大量解雇です。その解雇により、家族も含めると24,000～30,000人近い人たちが住む家も満足にない状態で路頭に迷っています。今回、私が参加したフィリピン情報センター・ナゴヤが8月下旬に行なったフィリピン・スタディツアード、解雇された農園労働者のグループに各地で会って話を聞くことができました。

なぜこのようなことになったかというと、その原因是1998年から施行された「農地改革法」にあります。この法律はコラソン・アキノ大統領時代の1988年に発布され、10年間の準備期間を経て1998年に施行されました。この法律の目的は輸出用作物を生産している農園や大規模農地の土地を、ある一定期間(10年)以上農園等で働いた労働者と農民に分け与えるか借地させるというもので、労働者と農民にとってとても革新的な内容でした。しかし、多国籍企業及び地主たちは土地を分け与えると自分たちの経営が成り立たなくなり利益がなくなるので、それを行なわないで済む方法としてあらゆる不当な手段を用いて土地を分け与えられる権利がある労働者(「受益者」と呼ぶ)をクビにしていったのです。

そのやり方はどの農園でも同じ方法で、ある日突然「彼らが到底できないような労働条件(ノルマ)」を押し付けて、それができないと解雇したり、その他いろいろ

*上の写真はドール(Dole)社のバナナ出荷作業場。
日本向けのバナナを選別しているところ。

いろな口実をもうけて大量の労働者を“クビ”にしました。

現状のフィリピンでは自国資本の産業と工場が非常に少なく、人口の1割以上の人々が外国に移住して働いている状態のため労働力はものすごく安く、“クビ”にした労働者の穴うめはすぐにさらに安い労働力で補充が出来ます。この不当な解雇に抗議し受益者になる権利を獲得するため、解雇された労働者4,000人が毎日20人ずつ交代で農地改革省ダバオ支局前で抗議の座り込み(ピケ)を続けていました。

このようなバナナ農園労働者への“低賃金”“劣悪な労働条件”“理不尽なクビ切り”という犠牲の上に、いま我々日本人が食べている「フィリピン産バナナの値段の安さ」が乗っているのが現実です。

この現実を少しでも改善するために我々は何ができるのか、それを皆さんといっしょに考え、今後の活動にいかしていきたいと思います。



ドール工場の労働者のストライキに参加(中央に座っているのが筆者)

INFORMATION

緊急募金にご協力ください

アフガニスタン国内避難民に 食糧・医薬品救援を！

アフガニスタンでは20年にも及ぶ内戦により国土が荒廃し、干ばつで食糧が不足しています。その上、アメリカ軍の空爆により食糧が決定的に不足し、危機的状況にあります。

日本国際ボランティアセンター（JVC）と、医療活動や地雷予防の活動を行ってきた現地NGO「O·M·A·R」との協力救援活動に、食糧や医薬品のための募金を募ります。

対象は東部ジャララバード周辺の村の人々です。

郵便振り込み用紙に「アフガン支援」「北朝鮮支援」とお書きください。

■振込先 口座番号 00260-5-14129

■加入者名「地球の木」キャンペーン

フィリピン青少年スタディーツアー

期 間 2002年4月1日(月)～7日(日)
訪 問 先 フィリピン、ネグロス島
参加費用 188,000円
募集人数 10名
対 象 16歳以上の青少年
説 明 会 2002年1月26日(土) 東京
2002年2月9日(土)
神奈川県民サポートセンター

ネパール語講座

期 日 12月18日(火) 18:00～19:30
12月22日(土) 10:00～12:00
1月8日(火) 18:00～19:30
1月12日(土) 10:00～12:00
1月15日(火) 18:00～19:30
全5回
場 所 あーすプラザ2F情報フォーラム(本郷台)
講 師 春日山紀子(ネパール留学中の会員)
対 象 初心者
参 加 費 5,000円
内 容 すぐに使える実践的なセンテンスを覚えます(要予約)

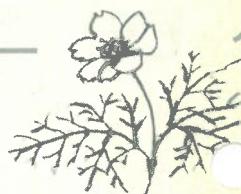
インド西部地震被災地復興の報告会

日 時 2002年1月26日(土)
午後2時～4時30分
場 所 フォーラムよこはま交流ラウンジ
参 加 費 無料
主 催 かながわ被災地NGO活動支援委員会

DPRK(朝鮮民主主義人民共和国) 育児院へ太陽光発電機を！

「KOREAこどもキャンペーン」ではピョンヤンの育児院に太陽光発電機を設置する予定です。

この育児院では、母親がいない子や親が病気で育てられない子を養育しています。マイナス26度の寒さの中、エネルギー不足に苦しむピョンヤンの育児院の暖房や照明・給湯等子どもたちの日々の暮らしを支えるための募金を募ります。



ネパールスタディーツアー

期 間 2002年3月23日(土)～3月31日(日)
訪 問 先 カトマンズ周辺・ナガルコット
参 加 費用 210,000円
参 加 人 数 10名
説 明 会 2002年1月26日(土) 東京
2002年2月9日(土)
神奈川県民サポートセンター

ご寄付ありがとうございました

生活クラブ相模大野台地区有志、聖ヨゼフ学園同窓会、村本(国際交流促進協議会)、石井克己、松沢明彦、伊藤雄司、田端弥生、戸田恵美子、後藤淳子、長瀬功、武安ますみ、デーモン・フィノス、牛塚宏子、北村勇耕、ディウフ・エルハジ・マサンバ、森本(敬称略)

デブラニ募金にご協力いただきましてありがとうございました

おかげさまで、112名・1団体から、2001年10月31日現在385,500円ご寄付いただきました。12月末日まで受け付けています。あなたの1,000円が一人の女性の人生に光を与えます。

ボランティア募集

手芸の好きな人、パソコンのできる人、イラストの好きな人大歓迎。事務局までご連絡下さい。

●ホームページ

<http://homepage1.nifty.com/EarthTree/Index.html>